

5. 後大静脈血栓に起因する牛の膿毒症の発生状況

○^{モリモト}森本 ^{ケンジ}賢治（豊橋市食肉衛生検査所）

本多 弥生（ " ）
菅 麻美子（ " ）
山口 貴宏（ " ）
山内 俊平（ " ）
細井 美博（ " ）

【はじめに】

牛の後大静脈血栓は、ルーメンパラケラトシス、第一胃炎に継発した肝膿瘍等の炎症の波及により形成される。この血栓の剥離により、化膿菌が血行性に全身に移行し膿毒症となる。近年、当所における後大静脈血栓に起因する牛の膿毒症が増加している。今回、平成14年4月からの後大静脈血栓に起因する膿毒症の発生状況及び細菌学的検査結果をとりまとめたので、その概要について報告する。

【材料および方法】

(1)発生状況:平成14年4月から22年12月に管内と畜場に搬入された牛100,384頭のうち、後大静脈血栓に起因する膿毒症と診断した44頭について年度別発生数、用途及び膿瘍の臓器別発生状況を調査した。

(2)細菌学的検査:血栓及び膿瘍を認めた臓器を捺印塗抹し鏡検後、5%馬脱繊維血液加トリプトソーヤ寒天培地に接種し、37℃、24～48時間好気及び嫌気培養をした。分離菌は、API 20 A、API Coryne及びAPI 20 Strep(シスメックスビオメリユー(株))を用い同定した。

【結果およびまとめ】

(1)発生状況:平成14年度から18年度までは年度あたり2頭(発生率0.02%)以下であった発生数が、19年度5頭(0.04%)、20年度9頭(0.07%)、21年度13頭(0.11%)、22年度12月までで9頭(0.10%)と増加傾向を認めた。用途別では、肥育牛40頭(0.04%)、繁殖牛4頭(0.12%)で、繁殖牛の発生率が高値を示した。膿瘍は、44例全てにおいて肝臓及び肺に認められた。このうち8例は他臓器にも膿瘍が認められ、心臓と脾臓に認められたものが2例、脾臓のみ2例、心臓と腎臓が1例、心臓、腎臓、子宮のみが各1例であった。

(2)細菌学的検査:44例中26例から菌を分離し、複数の菌が分離されたものはなかった。分離菌26株の同定の結果、*Fusobacterium necrophorum/nucleatum* 16株、*Fusobacterium varium* 3株、*Arcanobacterium pyogenes* 2株、*Bacteroides stercoris/eggerthii* 2株の順に多く分離された。分離に至らなかった18例は鏡検の結果、17例でグラム陰性長桿菌、1例でグラム陽性短桿菌を認めた。今後は、後大静脈血栓の発生要因等について調査し、結果を家畜生産現場に還元することにより、健康な家畜の生産に寄与していきたい。